

# 指導資料



鹿児島県総合教育センター

## 図画工作・美術科 第37号

—小学校，中学校，特別支援学校対象—

平成22年10月発行

### 図画工作・美術科における言語活動の充実

平成20年の学習指導要領改訂で重視されている事項の一つに言語活動の充実がある。中央教育審議会答申(H19.11)には、「各教科等における言語活動の充実は、今回の学習指導要領の改訂において、各教科等を貫く重要な改善の視点である。」とあり、さらに「言語は、知的活動（論理や思考）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤である。」と述べられている。

そこで、本稿では、図画工作科や美術科（以後、図工・美術科と記述する。）の学習指導における言語活動の充実をどのように図るべきかについて述べる。

#### 1 図工・美術科における言語活動の基本的な考え方

##### (1) 図工・美術科における言語活動とは

同答申(H19.11)は、知的活動やコミュニケーションや感性・情緒の基盤という言語の役割に関し、図工・美術科における言語活動の一例として「体験から感じ取ったことを言葉や歌、絵、身体などを使って表現することを重視する。」と示している。

また、山梨大学の新野孝典准教授は、「言語活動を充実させていくとは、形や色、イメージを言葉にするなどして、さらに形

や色の感じやそこから生まれるイメージを深め、豊かにしていくことである。」（『新学習指導要領の展開図画工作編』明治図書）と述べている。

これらのことから、図工・美術科における言語活動は、今回の改訂で新設された形や色、イメージ等の〔共通事項〕（〔共通事項〕の詳細については指導資料図画工作第36号を参照）と深い関連があることがわかる。子どもが、教師や仲間との言語によるコミュニケーションを通して、形や色の感じや、そこから生まれるイメージを、より明確にもち、豊かにしていくための学習活動であるととらえることができる。

##### (2) 形や色、イメージ等を言語で表すねらい 学習活動の中で形や色、イメージに関することを言語化することで、次のような成果が期待でき、教科の目標の実現につながる。

- ① A表現やB鑑賞の活動において、自分の思いや作品に対する具体的なイメージをもつことができる。
- ② 自らの考えを深めたり、他者の考えを取り入れたりすることで、考えを広げ、深めることができる。
- ③ 他者とのよりよいコミュニケーション

ンが可能になる。

子どもが形や色を基にイメージ等をとらえる場合、漠然としたとらえ方になる場合がある。このとき、より明確なイメージをもたせるために、「○○のような～」や「□□な感じがする」といった言葉で表現させるとよい。そうすることで、特にA表現における発想や構想の段階で、子どもに自分の思いや主題をより明確にとらえさせることが可能になる。一方、教師もそれに基づき、子どもの思いを深め広げる指導を進めることができる(発想・構想段階における指導の詳細は指導資料図画工作第35号を参照)。

また、言葉で自分の思いや考えを教師や仲間との間で交流させたり、あるいは、自分自身で思いや考えを深めたり、他者の意見と比較したりすることで、自分の思いや考えを広げたりすることができる。A表現では、発想・構想の段階をはじめ、すべての過程で効果が期待できる活動である。B鑑賞においても、よさや美しさを判断する過程に言語活動を取り入れることで、その充実が期待できる(鑑賞の指導の詳細については指導資料美術第33号を参照)。

さらに、それらの活動を通して、形や色等によるコミュニケーション能力が高まり、生活や社会と豊かにかかわる態度をはぐくみ、生活を美しく豊かにする造形や美術の働きを実感させることができる。

## 2 言語活動における指導の留意点

### (1) 言語活動のねらいの明確化

学習活動の中に言語活動を取り入れる際

に、特に留意する必要があるのは、授業のねらいや言語活動の場を設定するねらいを明確にすることである。言い換えれば、「なぜ言語活動を用いるのか。」「言語活動を用いることが効果的なのか。」ということである。例えば「主題を明確にとらえさせるために」や「他者の感想を基に自分の思いや考えを深めるために」等のねらいを達成させるための活動でなければならないということである。言語活動そのものが目的になると、子どものA表現やB鑑賞の活動が疎かになり、教科の目的である資質や能力の育成が妨げられる場合があるので十分に留意したい。

### (2) 発達の段階を考慮した指導

子どもの発達の段階を十分に考慮した言語活動とすることも重要である。本来、心に浮かんだイメージを言語化することは簡単なことではない。言語化は、個々の子どもの経験や記憶、語彙等の言語に関わる資質や能力によって大きく異なってくる。大人でも自分の思いや考えを的確に表す言葉を見い出すことは難しい。また、言語化することで切り捨てられる複雑な思いや考えも多分に存在する。指導に当たる教師は、十分にそのことを理解しておく必要がある。思いや考えを言語化できなかった子どもにも思いや考えは存在していることや、言語化されたとしても常に子どもの思いや考えを的確に表しているとは限らない。

A表現では、子どもの作品の優劣ばかりに目を奪われることなく、つぶやきや視線や表情等から、B鑑賞でも、子どもの話し

言葉や書き言葉，視線や表情などから，子どもの思いや考えを見取り，読み取ろうとする教師の姿勢が求められる。

### (3) 子どもの発言の受容

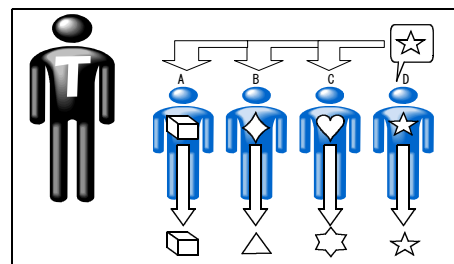
まず，教師は，子どもが言語化したものをしっかりと受容する姿勢が求められる。自分の思いや考えを言語化することは，時として大きな羞恥を感じる人が多い。教師がそれらを受容せず，教師が考える正しい答えだけを求めていると，子どもは自分の思いや考えを言語として表現しなくなってしまう。すべての子どものどのような意見にもしっかりと耳を傾け，受容し，更なる表現を促す姿勢で臨むことが大切である。

### (4) 子どもの思いや考えの見取り

今回の学習指導要領の改訂において，小学校では教科の目標に「感性を働かせながら」が挿入された。中学校においては以前から「感性を豊かにし」と示されている。これは，A表現及びB鑑賞の活動において，子どもの感覚や感じ方を一層重視することを示している。

例えば，教師の1回の発問に対して3人の子どもの順に発表したとすると，教師は，三つの意見を「多様な考え」ととらえがちである。しかし実際には，最初の教師の発問ですべての子どものが，それぞれに思いや考えを抱き，**図1**のように，最初の子どもの発表を受けて，他の子どもは，自分の考えを広げたり深めたりして，それらを変化させている。そして，二人目の発表でも，全員が自分の思いや考えを更に深め広げる

ことになる。このように個々の子どもは，常に感性を働かせながら「〇〇さんの意見で気が付いたんだけど～」や「〇〇だと思っていたけど，ちょっと違うんじゃないかなと～」のように自分の思いや考えを変化させている。前述の3-(2)と同様に話し言葉や書き言葉，つまり作品，発言やつぶやき，対話，ワークシート等への記述からそれらを見取ることが重要になってくる。



(図1 子どもの感性は他者の考えに影響を受ける)

## 3 言語活動を取り入れた指導の例

従来，B鑑賞の学習指導は，作品名や作者名，歴史的背景等の美術史的な作品観や，色彩や構図，製(制)作過程や材料等の技法に関する知識理解を中心に，教師から子どもへの知識や価値観の注入のみに偏る傾向が見られた。

今回の新学習指導要領におけるB鑑賞では，子どもたちが，よさや美しさを鑑賞する喜びを味わうようにするとともに，自分の思いを語る，友達と共に考える，感じたことを確かめるなどの活動を通して，自分なりに作品の意味を読み取り，よさや美しさなどを判断すること(中学校では「自分なりの価値を創造していく」ことまで)が求められている。

そこで，作品の鑑賞を進める中で，教師や仲間との対話を通して自分なりの価値を創造するための言語活動を取り入れた中学校第1学年の鑑賞の指導例を以下に示す。

☆ 中学校第1学年 題材名「わたしのお気に入りの一点」

(B鑑賞：独立した鑑賞題材)

過程	主な学習活動 (★は言語活動)	指導上の留意点
導入	1 1枚の絵を鑑賞し、作品を見て気付いたことを発表する。★ 	○ 1枚の作品を全員で鑑賞し、自由な雰囲気の中で感じたことを発表させる。 ○ 気付いたことの原因を尋ねることで、鑑賞のための視点(形、色、イメージ等)に気付かせる。 ○ 対話型鑑賞の技法を用い、子どもの発言には受容的な姿勢で臨む。 ○ 「その理由を説明できる人、だれかいますか。」とか「関連した意見はありませんか。」といった補助発問で子どもたちの思考をつなぐようにする。
	2 本時の学習課題を確認する。 自分のお気に入りの作品を見つけよう	○ 長期休業課題との関連を考慮し、市立美術館の収蔵作品のアートカードを用いる。
展開	3 グループごとにアートカードを並べ、自分の好きな作品を3枚選ぶ。	○ うまく選択できない子どもには、鑑賞の視点(形、色、イメージ等)を手掛かりに考えるよう助言する。
	4 カードを選んだ理由をグループ内で紹介する。★	○ 説明を聞く時には、自分の思いや考えと比較しながら聞くように助言する。
終末	5 一番のお気に入りの作品を選び、その理由を発表する。★	○ お気に入り作品を選んだ理由と、本時の学習活動を通して気付いたことや思ったことを簡潔にワークシートにまとめてから発表させる。
	6 本時の学習を振り返る。★	○ 本時の学習を振り返らせ、鑑賞する楽しさや自分なりの価値を創造する喜びを味わえたか確認させる。

「これはだれの作品でしょう。」  
というような答えが限定された発問ではなく、「この作品を見て、気付いたことはありませんか。」といった開かれた発問で子どもの感性に働きかける。

子どもの発言に対して「それはなぜですか」とか「この作品のどこから、そのように感じたのですか」といった切り返しの発問で、子どもの思いや考えを明確にとらえさせるようにする。

子どもの思考を意図的につなぐことで、鑑賞の視点や個々の子どもの感じ方について共有化を図る。

鑑賞の視点として、[共通事項]を常に意識させるようにする。

発言できなかつたり、文章にまとめられなかつた子どもも、思いや考えは必ずもっている。個別指導で鑑賞の視点を示したり、周囲の子どもの意見を参考にさせる。  
また、後で機会をとらえて、思いや考えを見取るようにする。

ノートやワークシート等にかける際には、その目的を明確にし、必要最小限にまとめさせる。

本時で発表できなかった子どもにも意図的に指名することで、思いや考えを見取る機会にする。

(鹿児島大学教育学部附属中学校 前野耕一教諭の実践を基に作成)

図工・美術科における言語活動の充実、教師が子どもの感覚や感じ方に積極的に働きかけ、子どもの思いを見取り、援助し、評価するための手段としても大きな意味をもっている。

また、これらの基盤となるのは、教師による確かな児童生徒理解であり、よりよい教科経営や学級経営であることも忘れてはならない。

子どもがつくり出した作品にのみ目を奪われることなく、作品に込められた子どもの思いに迫ることができる教師でありたい。

【引用・参考文献】

- 『小学校学習指導要領解説図画工作編』(H20)文部科学省
- 『中学校学習指導要領解説美術編』(H20)文部科学省
- 『新学習指導要領の展開図画工作編』明治図書(2008)
- 『まなざしの共有』アメリカ・アレナス 淡交社(2001)

(教科教育研修課)